

町民の方にご紹介したい情報をご紹介します！  
あなたはどの情報を  
知っていますか？

### 知る知る

No.14  
深める  
新得町

新得市街地区  
屋内ゲートボール場  
(西1条南4丁目4番地)

### 【どんな施設？】

町民の健康増進やスポーツレクリエーション活動の普及振興を図るために、平成2年に町が水力発電施設周辺地域交付金を活用して設置しました。  
土面のコート(横15m×縦20m)のほか、休憩室やトイレも整備されています。

### 【何が出来る？】

ゲートボールはもちろん、冬期間はパークゴルフも可能なほか、野球のキャッチボールなどその他のスポーツの練習にも使えます。  
また、スポーツに限らず、レクリエーション等にも使えます。

### 【どうやって使う？】

管理は「新得市街地区屋内ゲートボール場運営協議会」が行っています。使用を希望する場合は同

協議会にご連絡のうえ、負担金の支払いや鍵の借用を行ってください。

【使用可能日】 通年  
※定期使用団体がありますので、事前にお問い合わせください。

【負担金】  
0〜3時間まで 1千円  
3〜6時間まで 2千円  
6時間以上 4千円

### 【お問い合わせ】

新得市街地区屋内ゲートボール場運営協議会 事務局 桑原(厚生協会)  
(電話) 64-5001  
役場保健福祉課福祉係  
(電話) 64-0533



町長室から  
こんにちは  
新得町長 浜田正利

最近の出来事から町民の皆さんにも関わることを二点報告します。

一点目は、10月20日に北海道立新得高校の「開校記念式典」が来賓、元職員、卒業生など大変多くの関係者の方にご出席いただいたなかで開催されました。

歴史を振り返ると、昭和23年11月10日に清水高等学校新得分校(定時制普通課程)開校式が行われ、昭和27年4月1日に北海道新得高等学校(町立の定時制)に変わりました。

昭和37年4月7日に151名の全日制課程の初の入学式が挙行され、昼と夜の学校ができあがりしました。

昭和40年4月1日からは定時制生徒の募集停止、8日には北



海道立新得高校としての初めての入学式が挙行されました。

以来、今日まで学舎に声が聞こえてきました。高校、そして、高校生の存在が町の元気の源の一つと思っていただけに残念でなりません。しかし、特別支援学校として学舎から声が聞こえ続けることを救いたいと思っながらも応援をしていきたいと思っていますので、町民の皆さんもご支援をお願いします。

二点目は、ブラックアウトの経験から改めて今後の対応について何が出来るか、特に、暖房が必要な時期の対応に悩んでいます。

また、今回の件で北海道電力の責任について論じている誌面を読む機会がありました。

個人的には、電力の自由化により新電力が加わったことで電気代の安い会社から電気を買う人もいる中で、会社経営において広い北海道では大変なコストがかかると思っています。

このため安定供給に必要な設備投資資金は誰が負担するかを国のエネルギー政策のなかで整理してほしいと思いました。

同時に、JR北海道も同じようなことが言えるのでは感じています。必要なお金を「列車を利用する人、利用しない人」を含め誰が負担するのかと思います。

郷土の歴史を  
新得町郷土研究会が  
ご紹介します  
一緒に  
歴史の散歩に  
出掛けましょう

No.38  
屈足の水田発祥之地

屈足地区の開拓は明治35(1902)年から始まりましたが、開拓民の多くは米作りに強い関心を抱いていました。

大阪河内の人で帯広に住んでいた森口茂吉は明治41(1908)年、屈足原野の国有未開地50戸分、250町歩の貸付を受け、小作人を招いて開拓に着手しました。茂吉の息子の森口忍は明治45(1912)年、父親の水稲栽培の強い意向を受け屈足村字屈足西1線65番地に移住し、帯広から労働者を雇い入れて開田の上、水稲の栽培に着手しました。水田の水は、屈足30号の沢水を使いました。

最初は、品種の不適合と稲作技術の未熟により、草丈ばかり伸びて実が入らないという状況が続きましたが、大正2、3(1913、14)年頃、永山村(現旭川市)から宮越惣太郎を招いて水稲栽培の手ほどきを受け、よう



屈足水田発祥之地史跡石柱

やく実るようになりました。その後稲作は地域一帯に広がり、森口も大正8(1919)年には豊作に恵まれ100俵もの収穫がありました。  
戦前から戦後にかけては「屈足三等粳(うるち)玄米」の銘柄で流通し、多くの家庭の食卓に上りました。  
しかし、本州などでは品種改良によりおいしい米が作られるようになり、また、国内の米の生産量も増加傾向が続き、米が余るようになりました。  
このため、昭和45(1970)年から始まった国の稲作転換政策により、屈足の稲作は60年余りで終わりを告げました。  
昭和61(1986)年8月に、森口忍が開田に着手した近くの字屈足基線66番地には、新得町郷土研究会により屈足水田発祥之地の碑が建てられています。

## 短歌

### 新得短歌会

古希となり集いし同期賑やかに  
希望たかくも秋を迎える  
小野 恭子

秋の庭綺れいだねとふと見れば  
錦木なれるなる程その名  
小関 白潮

姉妹町かけ橋ならぬ手話舞台  
五ヶ瀬の空は澄み抜がりて  
中井由利子

新築の家また一つ増えたれば  
若き人くる明るさ見えたり  
高橋 幸子

短歌の会わが祝宴を賜りて  
魂しい宿る「残照の花」  
小野 洋子

砂洗う海獣の骨白々と  
現世の欲既に忘れて  
岡田御狸裸

生きていくことを自問しタメ息す  
幾多の偉人の足跡知る度々  
菊池 水月

山峡に山荘ならびて瀬音きく  
朝の五ヶ瀬の神秘に師あり  
斎藤美代子

## 俳句

### 新得俳句同好会

新じやがをふる里へ乗せ妹へ  
渡辺アヤ子

神の森紅葉のやえて佇ちて観る  
斎藤 青苔

杭と打つ音をき遠き天高し  
高橋 民女

豊の秋色々つめて子に送る  
八木 育子

日高嶺が釣瓶落とすとぐいと呑む  
月井 悠峰

避難する道路の地割れ風の色  
大崎かずお

豊年と言えぬ豆の葉冬迫る  
袴田ゆき男

耳鳴りは宇宙の音かそぞろ寒  
中島 土方